

深草野は藤の森の北なり。ひがしは大亀谷、にしは竹田里、南は墨染、北は稲荷を限る。むかし欽明天皇いとけなく
まします時、夢に化人來りて、君もし秦の大津父といふものを求て補佐し給はゞ、天下安泰に有給ふと告る。覺て後、
頓て曹司にその容を函して尋させ給ひければ、此深草里に住みける。是を連て朝覲し、天皇踐祚の時大藏卿に任じ給
ひければ、四夷静に治りけるよし、日本記にかけり。桓武天皇の陵は東の山本谷口といふ所にあり。車塚は天皇の御車
を埋し所とぞ。御輿塚、鎮守松、霞ヶ谷、霧ヶ谷。深草天皇の建給ひし嘉祥寺も、今は嘉祥寺畑と号て字となりぬ。此
寺の塔は元慶八年に建られて、近江の国米五十六斛、丹波の国米三百七十九斛に、貞觀錢十二貫文勅して寄附ある事、
三代実録に見えたり。仁明帝の陵、同女御貞子の墓、あるは左大臣冬嗣公の別業、大納言時繼卿の山莊、真幡寸社、拜
志寺、大日寺、後深草院の陵、昭宣公の營給ふ極楽寺も、今は里の名となりて遺りぬ。深草の郷中は、高貴の別莊、名
賢の古廟、靈仏の寺院かずくありしかども、千載のむかしとなりて、村老の口称にのみ聴ぬ、桑田碧海須臾に改ると
は此ほとりの事なるべし。

新 古 深草の里の月影さびしさも住こしまゝの野べの秋風 通 具

続 古 いとゞ又かりにも人の跡絶て積れば雪の深草の里 為 氏

続 千 深草や霧の籬にたれ住て荒にし里に衣うつらむ 雅 經